

## タカラバイオ株式会社 2023年3月期第1四半期決算(補足資料)

### 1. 2023年3月期第1四半期業績について

【決算短信9ページ】

(売上高)

- ・ 「試薬」は、一般研究用試薬が64億円(前期は55億円)と増収となりました。しかしながら、新型コロナウイルス検査関連試薬は、需要が減少し、56億円(前期は70億円)と減収となりました。その結果、試薬全体では、前期比▲4億7,700万円(▲3.8%)減収の120億4,300万円となりました。
- ・ 「機器」は、新型コロナウイルス検査向けPCR装置の需要が減少したことにより、前期比▲1億2,200万円(▲31.3%)減収の2億6,700万円となりました。
- ・ 「受託」は、遺伝子解析/検査関連受託および再生医療等製品関連受託の製薬企業向けの遺伝子・細胞治療薬の受託は堅調でしたが、新型コロナウイルスワクチン関連受託が減少しました。その結果、前期比▲6億6,300万円(▲33.9%)減収の12億9,100万円となりました。
- ・ 「遺伝子医療」は、GMPグレード試薬類の売上が増加したことから、前期比9,200万円(22.9%)増収の4億9,900万円となりました。
- ・ 以上により、売上高は、前期比▲11億6,900万円(▲7.7%)減収の141億200万円となりました。

(売上総利益)

- ・ 新型コロナウイルス関連の「試薬」、「機器」、「受託」が減収に加え、製品構成の変化により原価率が上昇したことから、前期比▲30億1,300万円(▲22.9%)減益の101億2,400万円となりました。

(営業利益)

- ・ 売上総利益の減益に加え、研究開発費・人件費に積極的に投資し、販売費一般管理費を増加させたので、前期比▲39億6,600万円(▲46.6%)減益の45億3,700万円となりました。

第1四半期は、新型コロナウイルス関連の製品・サービスの需要減少の影響を受けましたが、新型コロナウイルス関連以外の事業は、ほぼ当初計画の通りに推移しました。

## 2. 2023年3月期業績・配当(予想)について 【決算短信サマリー】

- 第1四半期の業績は、ほぼ当初計画通りに進捗しており、業績予想、配当予想(5月12日公表)は修正していません。

## 3. 新型コロナウイルス関連事業の状況について

- 当社グループは、PCR検査試薬について、月産1,200万反応相当規模の製造能力があり、状況に応じて製造を行っています。
- 第6波のピーク時(2022年2月)には、1か月で約500万反応相当規模の製造を行いました。
- 第7波といわれる2022年7月より、出荷量が急増しています。このため、第6波のピーク時と同規模の製造体制を整えています。
- 当社では、2022年4月より抗原検査キット(体外診断用医薬品)も取り扱いを開始しており、数千万規模の検査キットの供給体制を整えています。

(参考:新型コロナウイルス検査関連試薬売上)

期間	21/03期 第1四半期	22/03期 第1四半期	23/03期 第1四半期※
売上高(億円)	10	70	56

※ 23/03期は、PCR検査関連試薬と抗原検査キットの合算。

- 7月以降、新型コロナウイルス検査関連試薬の売上が急速に増えていますが、業績予想に影響がある場合は、速やかに公表いたします。

## 4. トピックス

- 脳指向性に優れた新規遺伝子治療用 AAV(アデノ随伴ウイルス)ベクター CereAAV™を開発し、米国の遺伝子・細胞治療学会で発表しました(5月16日)。製薬企業など各方面から問い合わせが多く、あらたに CereAAV ベクターの受託製造サービスを開始しました。
- サル痘ウイルス遺伝子検出試薬(研究用)、アデノウイルス40型・41型遺伝子検出試薬(研究用)を8月より発売しました。

2022年8月4日  
タカラバイオ株式会社

- ・ 東京大学医学部附属病院とともに社会連携講座「細胞組織コミュニケーション講座」を設置し、新モダリティとして注目されているエクソソームなどに関する共同研究を開始しました。今後、CDMO 事業や遺伝子医療事業において新たなモダリティとして当社が保有する技術とのシナジーを生み出していきたいと考えています。

以上